

明治新政府の官僚・漢詩人

秋月新太郎と谷謹一郎（二）

さとうたくみ

（会員 佐伯市池船町）

はじめに

秋月新太郎の『知雨楼詩存』に登場する人物名を調べていて谷謹一郎という人物に出会った。

国立国会図書館のデジタルアーカイブで検索してみると、最初に出了のは明治八年に刊行された『蒙訓・勸学以呂波今様』という学習本である。これは明治期の佐伯出身者として最も早い時期の出版物でもある。

更に彼の職歴や著作などが検索された。彼は明治政府大蔵省に奉職し、明治十一年の仏国博覧会へ松方正義に随行して西欧諸国を歴訪した。これもまた佐伯人としては最初の外遊経験者となった。後に松方大蔵大臣・内閣総理大臣の秘書官を勤めた生え抜きの官僚だったといえ

る。また漢詩人としての著作も多く残している。

二、谷謹一郎

仙禽せんきんの城下是れ吾が郷。七歳初めて四教堂に登る…。

（『湘南統稿・附稿』より）

余は年甫十歳にして橘門先生に就き句読を受ける。

先生の教導は嚴肅げんしゆくにして、誼よちしく師父を兼ねる。余

は賦性ふせい（うまれつき）謏劣せんにゅう（おとる）にして、前後

二十余年一つとして得るところ無く、師恩に負うもの

の少なし。明治四年初めて仕途に就き、八年大阪造幣局に転職。…十年十月東京に帰り大蔵省に奉職。

十二年十一月新居を牛込若宮町に構う。…

（『余瀝集』下巻「小有窩記」）

谷謹一郎、嘉永元年（一八四八）八月二十三日、佐伯藩士谷万年永祚（佐伯藩権大属、岡山県大書記官）の長男として生まれる。七歳で藩校四教堂に入り十歳より秋月橘門に師事し漢学を学んだ。名は士徳、朝軒と号す。

明治二年、橘門に随従して東京へ上り、同四年明治政府に出仕、同八年大阪造幣局へ転職、同十年東京へ帰り大蔵省に奉職した。このとき二十九歳。

(一) 谷謹一郎最初の出版

谷が上京した前後、同じく上京していた郷友たち十数名が集まり三同会を結社した。また大阪では二・三の同志と「和の応酬」を唱え、碧明（水碧沙明）吟社という漢詩結社をつくっている。

世を挙げて西欧化が進む中、矢野文雄や藤田茂吉は漢学を見放し福沢諭吉の慶應義塾に入った。今や漢学の意義が失われようとしていた。謹一郎は西欧かぶれを嫌い漢学の師恩に酬いる手だてを模索していた。

明治五年、文部省は学制令を定め学校制度をつくったが、教科書は自由発行、自由採択であった。地方では教科書の選定や教科書の不足に苦慮していたので、謹一郎は皇化を啓蒙しながら文字を習得できる学習本『蒙訓・勸学以呂波今様』の出版を思い立ったのであろう。序文（雪香の賛）に次のように記されている。

余は喜びて各種新聞紙の記すを読む。諸府県の子弟学に就く者日一日と多し。これ因みに皇化の及ぶ所といえども、また教育方法の善に因る也。余の友・谷士徳が著す所の「伊魯花今様」は、主として勸学の啓蒙あり。時に諧謔（冗談）を雑え入り易く務む

る所、咸く公世の日を刻む。余それを知り戸に蔵して家誦す。未だ学に就かぬ者、已に学に就く者、益学に勤るなり。その学事に於いて豈これ小補と云わんや。蓋し皇化の一助なりと賛す。

明治七年申戌十二月 雪香 撰并びに書す。

※雪香についてはその実名を知らない。

明治八年十一月十七日

版權 大分県士族

官許 豊後国海部郡第四大区廿六小区

著述出版人 佐伯邨字九山十三番地 谷 謹一

發兌書肆（發行書店）京都府東洞通三条上ル

村上勘兵衛

(二) 『滞欧日記』と『海外觀風詩集』

『滞欧日記』は明治十一年、仏国博覽会事務官長・松方正義に随行を命ぜられた谷謹一郎（当時、大蔵三等属・仏国博覽会事務取扱）が記録したもので、調布市在住谷宏氏が所蔵していたという。

※松方正義の滞欧期における経過と分析：…兵藤 徹

—谷謹一郎『明治十一年滞欧日記』を中心として—
運良く右論文が掲載された「東洋研究」No.73が手に
入った。これは昭和60年に大東文化大学東洋研究所が発
行したものである。

谷は松方のイギリス、ベルギー、オランダ、ドイツ、
スイス諸国の巡遊期間中（およそ九ヶ月間）すべてに同
行した。そして欧州各地巡遊における『滞欧日記』の記
述は、条約改正交渉の渦中にある駐在公使や外国高官と
の接触、および先進諸国の金融制度・産業施設の縦覧に
重きが置かれていたこと。

谷の関心はそのまま松方の関心を反映したもので、こ
れらの体験こそ明治十四年以後に展開される松方財政の
源流であったと、右論文は締めくくっている。

『海外観風詩集』は明治二十五年に観風吟社が編集。
海外を遊歴した諸名士五十七人の漢詩五六六首が収めら
れている。この中に谷謹一郎（号朝軒・大分県人）の漢
詩は十六首あるが一首のみ紹介しておこう。

龍動府雜詩

げんぜん
儼然たり北海の大都城、古より源々と俊英を出す。
義は君臣を繋ぎ三鼎を立て、富は鋼鉄を資とし百工
を成したり。

◆英国憲法の美は天下の甲である。上下両院と
帝室、鼎立して政を成したり。国内各地鉱山
多く、良鉄を産し製鉄の名をもつとも著す。
諸科工業極めて盛んなり。

人は肩を摩り影を分たず去り、雲は地に接し晴放ち
難く飛ぶ。別して注目に堪えぬ壯觀あり、白鬚の老
將天兵を閲す。

かおく
厦屋相連なり疊波の若く、虹霓（にじ）百丈長沙を
截つ。従来の市況奔馬の如く、老駝に似て人心復す
無し。富名天下に通じ著わすを強いて、貧窮の民首
都に比して多し。来往する舟車の利を知るを欲し、
龍動橋頭を幾度過ぎん。

谷謹一郎の外遊は一度ならず、明治十四年にも欧米視
察に赴いている。

(三)「職員録」に見る谷謹一郎の履歴

国立公文書館のアーカイブで谷謹一郎を検索すると、

明治二十七年の職員録・内閣官報局編が検出された。明治十四年から二十六年までの履歴が確認できる。

一、大蔵一等属・谷謹一郎欧米両国へ随行

明治14年 太政官作成 8月6日

二、農商務省 同省大書記官前田正名ならびに

一等属谷謹一郎、欧米派遣・費用の件

明治14年11月 太政官

三、谷謹一郎一等属、権少書記官に昇任の件

明治16年 官吏進退・大蔵省

四、権少書記官・谷謹一郎

明治17年8月

五、正七位 谷謹一郎外五二名任官の件

明治19年3月9日

六、大蔵省・大蔵大臣秘書官谷謹一郎外六名陞等の件

明治22年12月22日

七、内閣大蔵大臣秘書官谷謹一郎、内閣総理大臣秘書官

兼任の件 明治24年 内閣 8月17日

八、内閣総理大臣秘書官谷謹一郎外一名、内閣総理大臣

伯爵松方正義、愛知・岐阜二県出張に随行：

明治24年10月31日 (濃尾地震視察)

九、大蔵省・大蔵大臣秘書官兼内閣総理大臣秘書官谷謹

一郎依願兼官被免の件

明治25年8月10日 内閣

十、大蔵大臣秘書官谷謹一郎依願本官被免の件

明治26年6月13日 内閣

◎ 谷謹一郎特旨叙位一件(叙位裁可書)

大正3年11月8日

(四) 松方正義と谷謹一郎

松方正義は天保六年(一八三五)薩摩藩士の四男として生まれ、軍奉行や軍艦役などを勤めた。維新政府では日田県知事・租税頭、以降は大蔵省官僚として財政畑を歩んだ。内務卿大久保利通の下で地租改正にあたる。明治十一年仏国博覧会副総裁として西欧諸国を遊歴。帰国後、財政方針を巡って大蔵卿大隈重信と対立、明治十四年の政変によって大蔵卿となる。金融政策の実現に取り組み日本銀行を設立「松方財政」・「松方デフレ」など

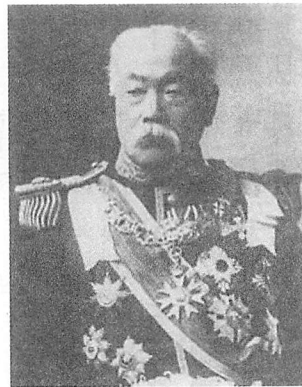
と呼ばれている。第四代、第六代内閣総理大臣。ほか大蔵大臣・内大臣などを歴任した。元老正二位大勲位公爵。大正十三年没、八九歳。

谷謹一郎は松方より十四歳年少である。同じ大蔵省に在職して松方に見出され仏国博覧会に随従、以後書記官として昇進、松方大蔵大臣の秘書官となり、松方第一次内閣では総理大臣兼大蔵大臣秘書官となった。松方が失脚し五代総理伊藤博文の時に両秘書官を辞職している。

官職以外に兼務したのは日本勧業銀行監査役理事、富士製紙株式会社常務取締役、川崎造船常務取締役、東海生命相互株式会社社長などである。単に書記官として有能だっただけではなく、外遊以来、松方と想いを等しくし、財政・金融・産業面でもその一翼を担ったといえる。

(五)『松鶴遐齡集』編集人谷謹一郎

松方伯閣下の古希(七十歳)は明治三十七年であったが日露戦争の勃発で祝事は延引されていた。明治三十九年四月、旧門の同志が委員会を発足して全国の諸名家の書画を集めて贈呈することになった。日本国内はもとより沖繩・台湾・清国・韓国などから九八〇余点の色紙が



上：海東伯松方正義肖像

左上：海東89歳の題額
(船頭町龍峰堂蔵)

左下：松鶴遐齡集序文
谷謹一郎撰書

明治三十九年日露事平
海東松方伯將閣古稀壽
宴故舊門客相謀欲廣乞
朝野諸名家書畫作帖子
以表祝意事起歲之四月
訖十月所集書畫元得九
百十餘頁作帖十五每帖
分裝書畫作函大小三分
帖納之乃ト十二月吉謹
贈呈
閣下倘賜清鑒何幸加
焉某ニ等頓首拜上

集まり、これを装丁して同年十二月に松方伯に謹呈された。

同委員の一人、谷謹一郎は自ら編集人となって各県別に索引を作り、自らの序文と松方伯の礼状を付して『松鶴退齡集』上下二巻を完成させ、明治四十一年一月に関係各位に発送した。

中には東京在住秋月新太郎（必山）の祝詩、佐伯善教寺小栗憲一（布岳）の「儂山松柏図」、同養賢寺三関天慧（鼎山人）の「蘭図」なども含まれているが、印刷の都合上絵画の部は題目だけが紹介されている。

谷謹一郎（朝軒）の詩文は出身地大分県の部に掲載され、松方略歴・功績・人柄などを讀める長文の漢詩となつている。その一部を紹介しよう。

孔子は仁を説き、釈子は殺を戒む。生々化育、天理をもつて行い、人道を以て立つ。故に好生の徳その陽報や必ず大なり。

輓近（ちかごろ）人心は日に涼薄に趨る。其れ好生に厚きは、我が松方伯海東公に之を見る。

明治中興の初め、公は日田県知事に出で、首め墮胎を禁じて胎児の生を得る者は幾百人。其れ当財政の

衝に入り、初めて兌換制度を定めて民を生かし、倒産の苦を免る者は幾千万人。其れ仁を施し徳を樹る。

時勢を洞観する眼光明らかな、毎事細心、至誠を推す。情は玉に似て温かく相隣に在り、行は自信儼かなること城のごとし。宮廷常に大臣を賜り遇し、社稷長・元老の名を存す。喬松独せず秀色同じく、一門の桃李（門下生）も春榮（ときめき）萃まる。

（六）谷謹一郎の漢詩集

『松鶴退齡集』の出版を終えた谷は、同年八月頃から体調を崩し明治四十五年に至るまで、相模や国府津の別荘での療養生活を繰り返している。このことが自分自身の生涯を振り返る好い機会となり、これまで日記がわりに書きためていた詩稿を整理して次々と発表した。

『空也集』 明治四十三年八月発行

此の集に収めるところ紀行詩・詠物詩及び次韻詩等あり。合計三百八十首。名を曰く空也集と。

朝軒 谷謹子徳 著

西遊詩存（読み下し）

封建の世は制度嚴密にして、民みだりに封疆（ほうきやう）（さかい）越えるを得ず、犯す者有罪。是れ以て風俗陋僻（せまくかたよる）し民の不幸。勝（あ）げて嘆くべきかな。維新の初め官つとに関門を徹し、大に越境の禁を解く。未だ幾ばくならず、郡県治定まりて行旅來往は東奥西薩まで隣並に相通ず。而して交通の利は国内に独り止まらず、凡そ海外各国は締盟立約し、則ち彼此（みづかち）に來往して有無相貿（あひか）ゆ。之れに比して封建の民は其の幸不幸固（もと）より弗弁（ふべん）すに往ら弗る也。余は淺劣魯鈍（せんれつろどん）にして寸分の技能も有らざれば、叨（みだり）に官斑（くわんぱん）を辱しめ、十たび袈葛（きあかつ）を換る。

明治十一年命を挙（た）いで仏国に赴き留まること一周年。十四年十月、再び欧米兩州に祇役（君命の任務）の命を奉（た）じ、淹留（えんりゅう）すること又一期を過（す）。……

『秋室遺稿』 明治四十二年十月発行

明治丁未（四十年）余は偶（たまたま）帰郷。其の（明石秋室）曾孫如磨（じよま）君を訪ぬ。君は秋室の草を出し見せ示す。請うて借覽を得、携え京に帰る。余は素より一牘本を蔵す、対照して校定。將（まさ）に活刷に付すも未だ果た

せず、今茲（このと）庚戌（四十三年）偶（たまたま）少間（すま）を獲らえ、乃（すなわ）ち如磨（じよま）君の允諾（いんたく）を経て再校活刷。以て同人に頒（わか）つ。

嗚呼、先生の詩は固（まこと）に余の華やかなる論贊（ろんさん）を容れず。観る者必ず定評あり。但し先生の意は公行に在せず、今この挙に及び九泉（はか）の靈あり。必ず將に曰く咄（ちやう）（しかる）、谷子德好事者なりと。

『湘南稿』 明治四十二年十月発行

湘南稿一

明治乙亥（三十二年）以降、避暑及び寒に相州辻堂・片瀬・小田原・及び前川等の各地に前後數回。毎回、雜吟詩若干あり。今遂次収録し以て異日の追憶の資とす。名を湘南稿と曰う。

『余瀝集』 上下巻 明治四十四年六月発行

戊申（四十一年）五月十日、佐伯郷友会は園友會を矢來俱樂部に開く。毛利子爵及び令夫人以下、家族少長に至る者百數十人。此に記実を賦す。

長少の旧新知は論じ、氣を和して一団（ご）茲（こゝ）に來集す。三春濃艶の節を拵（お）はず、清陰地に満ち日長き時。絶えて拘束せず天真を見、情味魚水の親を親しむ。

豈、階級別尋常有らんや、新朋友は是れ旧君臣。

坐を度る翁相依り童に接す、細雨に関わらず冥濛（うすくらひ）を書す。誰ぞ知る会友の心結びたるを、一団の真影中に収め在り。細雨中撮影

〔湘南統稿〕 明治四十四年七月発行

明治戊申（四十一年）八月以降、前後四回、余は相州前川邨に病を養う。庚戌（四十三年）十二月下浣。転じて国府津に至り和田氏に寓したり。楼は南に面す有り、北に山を負い、西則ち函嶺に対し富山を仰ぐ。之れ前川寓次に比して、眺望の美、蓋し数籜を加うと云う。其れ国府津に転ずるは養病切に換氣の功を以てなり。辛亥（四十四年）三月二十九日帰京。日を経ること九十一日、長短古今体詩一百七十余首を所獲し、改刪訂正して百十五首。名曰く湘南統稿と。

〔湘南別稿〕 明治四十五年七月発行

天放先生（秋月新太郎）片瀬知雨荘にて病に臥す。訪ね往きて相見ゆ。帰後、此に賦して贈呈。訪れるを欲して已に幾回期を愆り、丰姿に相見えたる懐い開く。庭に寒色留む雲根の石、座に古香を帯

びる瓶裏の梅。造次（あわたたしい）令を継ぎ手を分かつて去り、隻り辞し猶克く蒙を発き来る。居を隔てること三十里、愁い何ぞ限らん、峯頭尽くさず夕日類る。

（七）谷謹一郎帰郷の詩

明治三十一年

◎帰郷に作す有り、二首

◇暫く征鞍を駐め三日を奇す、故園の情味当時を憶う。門を踵ぐ通刺（名刺）生面（新顔）多し、水を隔て見る山皆旧知。叔母猶腰を磬折して存す、老顔相見え珠垂れの涙。灯前に話し尽くす三十年の事、午夜沈々と漏転（時の移り）遅し。

◇三十年前故関を出で、鬢辺今剩り二毛に斑つ。新楼快く迎える新婦に似て（宿豊海楼新築に係る）、好き友情、好き山に対する如し。潮漲り老潭に魚自ら躍り、煙遠くに横たえ樹鳥還るを知る。多歳（長年）官を作し禄位を貪り、絶えて微効も無く是れ何の顔。

明治四十年の春

◎舟佐伯港に達す (友の出迎え)

轉眼湾々取次移 眼を転ずれば湾々取り次いで移り

山光明媚境尤奇 山光明媚の境、尤も奇なり。

厚情多有相迎友 厚情多し相迎える友有り

却覚舟行到岸遅 却つて舟行到岸の遅きを覚ゆ。

◎警露館の筵に陪す (毛利公の招待)

不諭官爵況卑尊 官爵を論ぜず況や卑尊をや

接膝相斟笑語温 膝を接し相斟む笑語温かなり。

無復當年鞦韆態 当年復す無し鞦韆の態

一宵燕喜亦天恩 一宵の燕、亦天恩を喜ぶ。

◎故友數十名豊海楼で懇親会を開く

歌罷陶然太白浮 歌に罷れ陶然と太白浮かぶ

一身為客亦無愁 一身客となり亦愁いなし。

交情不興江山改 交情、江山改まるを興はず

十歳重登豊海楼 十歳重ねて豊海楼に登る。

◎鴻山公に陪し黒沢村に桜を観る

老樹二株、幹の大きさと數十間、高さ十余丈、

凡そ三百年経る所と云う。

◇樹自ら高々、水自ら清く、一溪を送り去り一溪を迎う。花を見る以外に詩趣多く、人與の間、雲後先を

行く。

◇遠望疑うらくは彩霞曳く如く、香雲は古禪家の鎖に

背く。鴻公(毛利高範)の世系に相終始して、剛に

是れ三百年前後の花。

◇凡草俗花、何ぞ同じきを得ん、芳名早く已に南豊を

圧す。温々と其の色は君子の如く、京華輕薄の風を

羨まず。

◇閱し尽くす歳華、三百年(年)を過ぎ、空將に清艶た

る山阿に倚る。香雲は老双樹に春を満たし、却つて

一眸は千本の多きに勝る。

◇旗々たる香雲、雨は晴の始まり、山光座に入る余清

有り。一名将芳信を尋ねて従り、京洛なお黒沢の名

を伝う。

十年(明治)西南役に野津大佐等の諸将来観、

爾後、京洛また黒沢の名を知る。

◎松関は毛利鴻山公の別墅なり

山に倚り楼を築き、東南面は海に對す。山の

眺望は絶佳、称して曰く豊南第一楼と。訛ら

ざるなり。

◇天景みな我のために収め有り、登りて檻（らんかん）に倚り臨めば忽ち憂いを忘る。詩を思えどまた奇語著しく復し難し、只道う豊南第一楼と。

◇孤客登りて臨めば春色催す、豊南にこの鳳凰堂有り。依然として独り毛利家の有にあらず、尽無し、江山に月帯びて来たる。

◎故友との別れ

山桜万樹芬葩を競い、同じく故園の春色を賞し嘉す。

この際何ぞ堪えん遠別たり、歎び又を期し花の短しを怨む。

おわりに

大正二年五月、天放先生（秋月新太郎）が七十五歳で逝った。谷謹一郎（正五位勲五等）は翌大正三年十一月八日に六十六歳で没した。墓所は大田区萩中の真光寺にある。また海東伯（松方正義）は大正十三年七月没、八十九歳の長寿であった。

今回、谷謹一郎研究のために古書店から入手できたのは『海外観風詩集』・『松鶴遐齡集』上下巻・『続湘南稿』・『東洋研究』73号である。他は国立国会図書館

「近代デジタルアーカイブ」を閲覧した。多くの漢詩集を拾い読みし、ほんの一部分を紹介したに過ぎない。また漢詩は自己流に読み下したので、後学の正解に委ねた。い。

「佐伯市史」の人物志に掲載されていない秋月新太郎と谷謹一郎、二人の功績を佐伯市民として顕彰すべきではなかるうか。

